

キョウチクトウ

(学名： *Nerium oleander* L.)

岐阜県立国際園芸アカデミー 上田 善弘



周辺の地中海沿岸独特の風景と植生

この写真のキョウチクトウを見て帰国後、書籍で調べるまでお恥ずかしながら、私自身は普段見るキョウチクトウはインド由来のもので、モロッコにも野生があるとは思っていなかった。その場所はモロッコの最も東、アルジェリアとの国境に接した、ウジュダ・アンガット府ウジュダ市郊外の自然植生地である。車で案内していただきながら、どこにでもキョウチクトウが見られるので、植栽されたものと思ってしまう。ところが、調べてみると地中海地域から中国にかけての季節によって干上がる川床や川辺に自生するとある。

まず、なぜモロッコに出かけることになったかから始めたい。一昨年、当県の古田知事がモロッコのウジュダ・アンガット府(県)を訪問し、地方自治体同志の交流を行うという覚え書きを交わして来られた。もともと古田知事は前職外務省にて中東アラブ圏との繋がりをもっておられ、駐日モロッコ大使と親しいことから、このモロッコ大使の故郷、ウジュダ・アンガット府と交流を進めることになった。その交流の第一歩として、当国際園芸アカデミーにウジュダ・アンガット府から研修生を受け入れることになり、具体的な進め方等について交渉するため、昨年モロッコに出かけた次第である。

モロッコは北アフリカに位置し、南にはサハラ砂漠が迫ってきている国でもある。そのため、砂漠の北進を食い止めるための対策を急務としており、今回の研修生の主たる研修テーマも緑化技術の取得にある。

モロッコ滞在中には、府の環境部門の職員、技術者との情報交換、都市公園、自然公園、緑化植物の苗圃、ごみ処理施設などの視察が組み入れられていた。この視察の途中で、ウジュダ市郊外の自然植生を見る機会が得られたのである。

車窓から見えるのは典型的な乾燥した地中海沿岸地域の風景、植生そのものであった。樹木はオリーブに代表される葉の硬い、広葉樹を主とする。そんななか、干上がっている川に沿ってキョウチクトウが群生していた。まさに上述の書物に記載されている通りであった。写真のキョウチクトウは道路わきに生えていたものである。このようにして、道路沿いにも点々とキョウチクトウを見ることができた。この植物は、耐暑性、耐乾性が強く、しかも大気汚染にも強いので、都市の街路樹としてずいぶん使用されているのは周知のことである。実際の自生地を見て、その性質を納得することができた。

さて、私がキョウチクトウの故郷をインドと思っていたのにはそれなりの理由がある。キョウチクトウにはかつて、*Nerium indicum* の学名が使われ、*Nerium oleander* の方がセイヨウキョウチクトウと呼ばれていた。まさに、その学名から「インドの」ということになる。現在は*Nerium*属は一属一種とされ、*oleander*のみ一種である。インドのものは地域変異ということで、*N. oleander* var. *indicum*と一変種として扱われることもある。ちなみにキョウチクトウはオレアンドリンを主とする有毒物質を植物体を含み、生葉1枚で致死量があるとされている。



キョウチクトウの花のアップ